

発刊の辞

## 「日蓮学」とは

望 月 海 慧

身延山大学では、「東洋文化研究所」を「国際日蓮学研究所」に名称変更を行った。「東洋文化研究所」では、仏教を中心としたアジア文化の研究を行い、その成果として、浅井田道先生による日朝上人の『補施集』の翻刻、寺尾英智先生による『身延山資料叢書』の刊行、池上要靖先生、柳本伊左雄先生によるラオス・プロジェクトの成果を上げてきた。

しかし、身延山大学では平成二十九年度の学部改組にあたり、研究所の在り方も問われた。少子社会を迎え、大学教育の状況は今後さらに厳しいものとなる。もはや市場のニーズを探すことは困難であり、どのような形で大学を存続させるのかを考えなければならぬ。そのためには、高等研究機関としての研究所を充実させる必要がある。その際に、本学が求められるべき研究は、日蓮聖人とそれに関連するものとなる。これらの研究については、本学が世界的中心になるべきであり、他に譲るわけにはいかない。ボーダナートのランジュン・イエーシェー・インステイチュートにチベット仏教を学ぶ学生が集まるように、日蓮聖人に関わる研究を志す者が世界中から集まるセンターとならなければならないのである。

もちろん、関連する研究機関としては、すでに、立正大学の「日蓮教学研究研究所」、日蓮宗常圓寺の「日蓮仏教研究所」などがある。それ故に、これらの先行する研究所との差別化も明確にしなければならない。そこで提唱したいのは、総合的学問としての「日蓮学」の構築である。そのヒントは、ドイツ留学中にハインツ・ベッヘルトラによる『インド学入門 (Einführung in die

『Indologie』を読んだことに始まる。そこでは、インドという研究対象に対して言語学、哲学、文学、社会学などの諸分野からのアプローチを紹介している。帰国後、身延山大学の各種講座で、「インド学」を「仏教学」に置き換え、仏教学は人文科学だけでなく、社会学・自然科学にも及ぶ総合的学問であることを話してきた。この視点から、日蓮聖人に関わる研究を総合学問の「日蓮学」を提唱するのである。

「日蓮学」とは、教学の確立という狭い視点から捉える学問方法ではない。日蓮聖人だけでも、その研究内容は、思想や宗教観から始まり、御遺文の文献学・書誌学・国語学的研究、その歴史的背景や文化的背景、さらにはその教えの現代的意義にまで及ぶ。御遺文からは、当時の経済や法律などの社会科学の情報だけでなく、天文学や医学などの自然科学の情報も得られる。これを現代までの日蓮聖人に関わるすべてのものに適用したものが、「日蓮学」の研究対象となる。

もちろん、この方法論は日蓮宗内にとどまるものではない。「インド学」を「日蓮学」に適用したことと同じことは、他宗の宗学にも応用できる。すなわち、「日蓮学」の構築は、総合学問としての仏教学の方法論を提示するものであり、ここにモデル・ケースを提示するのである。

その「日蓮学」を発信するメディアとして、ここに『日蓮学』を刊行する。身延山大学設置の研究所であるが、「日蓮学」に関する国際的センターになることを目指しているので、論文の掲載については、日蓮宗内だけでなく広く門戸を開いている。狭い視野にとらわれず、優れた研究成果を掲載していくことを目指している。